

## <各事業前年度評価検証>

黒石特別養護老人ホーム

### <<評価>>

- ・状態像に応じたサービスの提供ができる
  - ・認知症チームケア推進加算取得を目指した認知症ケアの体制作りができる
- 1・医療と連携できるルールを作りケアサービスへ活かしていく
- 1 入所者の状態像から、発生しやすい BPSD 症状の背景要因を探り、主に身体的要因、環境要因から起きやすいと分析した。具体的支援内容としては、①不快感を軽減し疲労感を取り除くこと、②スキップを図りリラックスできるようにすること、③利用者の気持ちに寄り沿って落ち着いた会話ができる環境を用意すること、が BPSD 症状の発生と関連していることがわかった。自分たちの関わりや当たり前のケアが BPSD 症状を改善できていることを日々のケアを通して実践できるように職員に支援内容を周知し、実際のケア場面で活用している。
- 2 日々の業務の変動に左右され、優先順位を個々で判断し、情報共有や健康管理に対する協議が遅れることがあった。利用者の生活から成り立つサービスが健康管理に繋がることが想像できず効率重視の対応をしていた。必要な情報共有と各々の優先すべきケアが何かを判断し行動できるために、『気づきを行動に移す仕組み作り』として、環境面からカリキュラムの変更、状態変化時の相談、看護、介護の役割を明確化し、なんとなくでも気づいたことを言い合える気づきの吸い上げの場と、新規、退院後のカンファレンスの場を計画的に実施することで職員間での情報共有とケアの方向が見えてきている。

### 課題

- ・認知症チームケア加算取得後の見合ったケアサービス提供が実践できるように疾患ごとの特徴や背景要因を知識として習得し、専門的な認知症ケアの実践が必要。
- ・状態変化の気づきからケアサービスへ繋げるため、総合的視点（既往歴、内服薬、検査データ、生活状況、ADL、行動心理症状）からの新規、状態変化時のカンファレンスの実施、専門職として安定的なケアサービスの実践と定着に向け取り組むこと。

黒石デイサービスセンター

### <<評価>>

- ・令和6年度介護報酬改定にて、入浴介助加算について入浴介助の研修の実施が追加された。入浴介助技術の向上を図るため、研修を9月に開催した。提供前のアセスメントについて、入浴提供の目的についての研修を実施し、身体を清潔に保つだけではなく、疾患や高齢者の特性を意識し対応することを再確認、振り返る機会となった。

研修後の変化として、利用者がリラックスできるように環境を整え（適切な人数で提供、騒がしくしない。）気温の変化があるので、脱衣室浴室内の温度差に注意し安全に入浴を提供できるように配慮するようになった。全介助をしてしまいそうな場面でも声掛けでの促しをし、できない部分のみを介助するなど、自立支援を心掛けている。決められた時間内で終わろうとせず、入浴拒否や体調不良の方を午後帯に変更するなど臨機応変に対応することで、昼食時の配膳、食事介助、口腔ケア介助等に充分対応できるようになった。

- ・遅れなく評価や計画書の作成から同意まで出来る体制をつくる。
- 三位一体計画書は毎月更新、作成しているが、通所介護計画書と個別機能訓練計画書と共に該当月に追いつかず、月遅れになっている状態である。月間業務工程表があったが、優先度なく進めていたのが現状であった。1月に業務工程の見直しを図り、生活相談員の作業を表出し、工程表にそって行い実践しているが、検証までは至っていない。
- ・利用者像が多様化しており、認知症の利用者も多くなっているなかで、認知症の原因疾患の種類や脳の障害部位の特徴的な症状の把握や支援方法、アプローチ方法が不足していたため、適切なケアを行えなかった場面があった。
  - ・今年度の利用者像や傾向から見えたこととして、特に新規利用者に関しては、利用後すぐに体調を崩し入院したり、そのまま施設入所する方が多く、通所の利用期間が短いことが特徴的であった。そのため利用人数が安定せず、稼働率が大幅に低下してしまった。
  - ・選択メニューの充実では、案内文を発送し、点つなぎや塗り絵、脳トレのテキストの購入の仕組みを作成している。カリキュラム内容に偏りがあったことで配置職員が固定化してしまい、体調不良等に繋がること

もあった。カリキュラム全体を見直し、全職員が各サービスを提供できるように変更した。それによって腰痛や疲労の軽減があり、モフトレの活用も毎月の実施計画をもとに職員全体での関わりが可能となった。

- ・地域性の把握や高齢者が集う場をつくる。

黒石市内の高齢者分布の把握をし、高齢者が集まる場を作り、報徳会を知っていただく場として、まずは西部地区へのアプローチを考えたが調整がつかなかった。北地区へのアプローチに変更し、来年度は報徳会を知っていただく機会として移動カフェを実施し、高齢者福祉施設としての機能を活かしていく。

#### 課題

- ・評価、再アセスメント、計画書作成が工程表に沿って行われているか検証し、継続的に実施できるようにする必要がある。
- ・認知症ケアについての理解を深め、全ての職員が適切なケアを行えるようにしなければならない。
- ・利用者が健康を維持でき、長く自宅で生活するための助言やサービス提供を行う必要がある。
- ・移動カフェをきっかけに事業の周知と集客ができ、利用者数の充足に努める必要がある。

#### 黒石在宅介護支援センター

##### 《評価》

【法改正の内容の理解を図り、適切に事業の運営を行う】

・今年度の介護保険制度改正内容について、**行政の案内を用いて**説明を共通化し、利用者や家族へ各事業所とともに説明を届けることができ、納得した上でサービス利用を安心して利用していただけるよう**マネジメントに活かし**対応できた点が良い点であった。

・環境改善をし、集中できる作業環境を設定したことで、**滞りないマネジメント書類（ケアプラン一式）**の数を2.3アップさせることができた。

・今年度異動により新しく2名の配置がある。まずOJTに必要な手順書を整備し、育成にあたり活用、追加修正を並行しながら活用し、マネジメントの一連を獲得できるレベルとなっている。初心者部分を作成したことで、応用編の実際の関わり方や、現場での仕切りなどの対応手順を追加したいとの要望が聴かれた。

【個人管理ではなく全体で管理することでマネジメントの躓きを見つけ、改善と実践へつなげる】

・**個人が活用しているカレンダー表**を用い、**モニタリング以外も含めた**月間のスケジュールを**全体で見える化した**ことにより、以前に比べ各マネジメント工程に着手するタイミングを数日早めることができた。しかし、月末になると進捗に個人差があり、足並みを揃えることができずにいる状況である。改善すべき点として、マネジメント工程期日を連動させること、遅れのまま次の工程を進めてしまっていることが挙げられる。

#### 課題

- ・**事業所全体のスケジュール管理ができておらず、業務遂行の安定性が図れていない。**
- ・**OJT指導の役割分担の整備が不十分である。**（個別分析・指導）
- ・マネジメント技術について学べるよう、OJTの内容へ追加。

#### 黒石ケアサポートセンター

##### 《評価》

1 行動・心理症状の予防、早期対応に向け、効果的なケアをチームでアプローチし、互いの良い影響力へ繋いでいく。

個別に行動心理症状を評価し、背景要因を分析、計画を立案し実践、評価をする一連の流れを整えることができた。毎月担当者とカンファレンスを行うことにより、計画実践の際、想いや利用者の変化の気づきを共有できたことは取り組みを継続する力となった。

また、実践のなかで、身体的ニーズや環境等、利用者の日常生活への影響の気づきとなっていたが、利用者のニーズを満たすため、個々の内的欲求（見えない部分）を探り、幅広い要因分析への気づきまでは到達できなかった。

業務カリキュラムを見直し、サービス内容をもとに活動実施一覧表を作成しチームで取り組んだ。体制を整え取り組んだ結果として、利用者の方の行動・心理症状が、少しずつ減り、穏やかな生活の維持へ繋がっている。

## 2 原因疾患、脳の仕組みを知り、理解を深め根拠ある支援をする。

認知症の種別やそれに応じたケアへ繋がるよう、認知症疾患別の脳の損傷部位からの行動・症状、特徴とケアで配慮すべき項目を一覧にまとめた。今年度活用まで至っていないが、今後アセスメント視点の広がりや意図的な関わりへ繋がるよう、法人全体での認知症共通研修、カンファレンス時活用することとした。

### 課題

・行動・心理症状予防計画に基づき実行をしているが、計画の内容により季節的に取り組みにくいものや具体性に欠けるものがあり、チーム全体での実行の定着までは至らなかった。職員誰もが簡便に実施できるツールを見出すことや、利用者も気軽にできる活動や環境設定の必要がある。また、認知症疾患別の症状を理解し、アセスメントから意図的に関われる技術を身につけていく必要がある。

・小規模登録者率 83%、前年度から 11%減である。状態像や個々の利用者のニーズに変化がある中で、利用時の満足度に向け、活動の充実化、サービスパッケージ、強みを活かしたサービス展開を図るための取り組みが課題として残った。

### 養護老人ホーム景楓荘

#### 《評価》

##### ・サービス見直しについて

利用者のケア内容と業務カリキュラム、チェック表、ケア実施に伴う環境面の仕組みを作ったなかで、実際の運用をしてきた。いつ、誰が、何のサービスを提供するのか明確になるなか日々の職員体制に不安定さがあり、また、利用者の状態不良により安定したサービスの提供ができない状況もあったことから、変更になった際の対応を見直しした結果、変更時でもサービスに対応でき、確実にケアを実施することへ繋がった。

##### ・取り組みについて

利用者の状態によって入院や退所となり、入所者数が減っている状況があることから、新規利用者を受入れと、養護老人ホーム景楓荘を知っていただくために、各市町村へ挨拶回りを行った。各市町村へ出向き、現在の措置状況や、相談にくる利用者の状況等、情報交換を行い、各市町村でも財政的な問題で措置入所が難しいことがわかった。直接挨拶をしたことで、互いに相談しやすい環境となった。

「利用者に適切な関わり」と「介護技術のスキルアップ」について取り組みを行ってきた。シーティング、ポジショニングについての理解が不足していたため、理学療法士や介助量の多い黒石特別養護老人ホームの職員へ相談しながら進め、知識、技術を学び実践している。職員全員が共通理解できるよう、実践までは動画や写真を作成し、確認をしながら実践へ繋げている。結果、職員全員が対象利用者に対しケアにバラつきなく同じ方法でポジショニングを実践することができた。

### 課題

##### ・サービスの見直しについて

状態変化からサービス提供まで流れはあるものの、介護、看護、相談員の役割分担が不足していたことで実施できず、サービス提供に遅れが生じてしまった。役割分担を再確認する必要がある。

##### ・取り組みについて

各措置機関の財政的背景からか措置入所は難しい状況が続く中、各市町村や関係医療機関と顔が見える関係性を継続し、今後も養護老人ホーム景楓荘を知っていただき、利用へ繋げていくため、挨拶回りし情報交換を継続していく。

福祉用具を活用し、移乗やポジショニングを実践することはできたが、対象利用者の入院により継続した取り組みができなかった。原因が誤嚥性肺炎だったことから、食事の姿勢、誤嚥のメカニズムの理解が不足していた。また、介護技術に集中し、自立支援のアプローチが不足してしまい、利用者の身体機能低下や精神不安定さに気付くのが遅くなってしまい、夜間不眠傾向になる利用者が増え、認知症症状が強く出てしまったからの検討や対応となっていた。少しの変化に気づき、事前に状態悪化を防ぐため、日々の関わりや活動性を持たせるための取り組みが必要である。

## 事業管理部・給食グループ

### 《評価》

2024年度、クックチルシステムの導入により、調理工程が簡略化され業務負担軽減になった。調理しないことで生ごみや廃棄物の量も格段に減少され、調理済み食品の納品で食中毒のリスクを減らし、安心安全な給食提供に繋がった。また、食事提供では、今までは個別対応が増えることで複雑化し、配膳に関わる全ての職員がそれを把握するのが難しい状況だったが、食材のアレルギーがある方のみを代替え可能にし、好き嫌いで対応をなくした。これにより厨房職員と配膳する職員が共通認識を持って取り組むことが可能となった。毎月各事業部と情報共有をし、利用者の状態や食事、行事に関することなどを話し合い、その都度決まった内容を随時発信し、情報の漏れがないように今後も続ける。

栄養マネジメント業務では、クックチルの栄養量の面では常食、ソフト食、ミキサー食ともに栄養価は高く、調理していた頃と比べると1日のたんぱく質摂取量は約4.0g多く、食事での栄養確保が図られている。提供方法が変わったことで、利用者の栄養状態が悪化したという報告はなく、個別に栄養量の確保が乏しい方にはエンシュア等の栄養補助食品が処方されており、低栄養レベルでは、低リスク17名、中リスク24名、高リスク5名（黒石特別養護老人ホーム対象者数46名：2月時点）となっている。

作業内容が変わったことで、新しい業務カリキュラムが作成され、事業部会議を再開し、食事形態の理解から、給食としての取り組みなどをお互いに確認し合い共通理解が図れた。職員の育成部分においては、今まで基準になるものがなくフォローアップでの本人への口頭で終わっていたが、クックチル導入に伴い調理、栄養士業務の水準を修正し、現在仮運用を行っている。水準を活用することで、不安な部分がわかりフォローアップ時に活かしている。

### 課題

- ・クックチルの献立が決められた中での、栄養状態の維持、向上にむけてどのように栄養介入していくか検討していく。
- ・栄養ケアマネジメントの介入の拡大と、各事業部への栄養介入をどのように進めていくかそれぞれの事業部の状況把握と協議が必要。
- ・職員の育成、独り立ちに向けた体制整備と水準の確定が必要。

## 事業管理部・総務グループ

### 《評価》

・計画的に適正な業務を行うため、手順書に期日を追加した。ソフトの切り替えや電子申請など今年度新たになった業務に対して手順書作成し、担当外の人でもできることを確認している。また、週間・月間業務チェック表を活用し、業務の担当者が電話等の日々の業務調整を行うことができた。

### ・経費の動向把握

#### ① 電気料

今年度と前年度の金額の差は夏以降の支援補助金の終了もあり555,509円と増加しているが、使用量については不使用箇所のコンセントを抜いたことや、エアコン・照明をつけっぱなしにしないよう各事業部の実践もあり7,690kwの減少となっている。しかし、下半期の使用量の前年度の差は増加しており、要因として、冬期間のエアコンの使用や、暖房設備の故障などが考えられる。

#### ② 水道料

金額の差は116,622円の減少となっている、使用量は井戸水から上水道へ切り替えた箇所もあったが279m<sup>3</sup>の減少となっており、要因として、各事業部が節水に取り組んだ結果だと考えられる。

#### ③ コピー用紙等事務用品

上半期までで、前年度との比較は51,505円とコピー用紙ひと月あたり1.5箱（15袋）の減少となっている。

#### ④ コピー機チャージ料

下半期から集計をはじめ、10月にコピー機の前に貼り付けていた文章を新たにし、料金の減少

が続いている。事業部からも印刷方法について問い合わせがあり、無駄な出力の減少につながっている。

#### 課題

- ・事業部として各業務にかかる処理状況や、全体の月での動きも共有、把握する必要がある。
- ・今年度経費の動向把握として集計した結果見えてきた要因から、冬期に入る前など事業部へ使い方など発信していく必要がある。